

第二章 治す念波の話

山本（画家）——甲南高等学校の先生で河合という方があり米国へ留学などした方ですが、今は商大の先生をしていられます。その人は一人子供が生まれると。その記念出版として一冊ずつ書物を出版されますので、その書物の一冊を貰って読みましたが、その人が米国にいた時に聞いた話として書いてあるのに、ミセス・フィールドというひどい全身神経痛で十数年間一歩も動けず病床にいた人がありましたが、ある日聖書に頭われたキリストの奇跡のことを考えていました。キリストがああいうふうに奇跡的に病気を癒やしたという事実が実際あったと仮定するならば、そういう病気を治す念波というような神秘的な力が宇宙に充ちているに違いない。さてそういう神秘的な力が宇宙に充ちていると仮定して、その神秘的な力を受け容れる工夫をすれば、その神秘的な「治す念波」というものが自分に流れ込んで治してくれるに違いないと思つて、安臥あんがの形式など工夫して、できるだけ心を静かにして、宇宙に満ちている「治す念波」を感受することに努めたのです。すると、一週間目にはベットの上で半身を起こすことができるようになり、歩いてみるとボツボツ歩けるのですね。間もなくその十数年間の痼疾こじつが全快したのですが、ある日腹の立つ出来事が起こって非常

に腹を立てたところが、たちまち病気が十数年前に逆戻りして激痛で動けなくなったので、「これは悪いことをした、怒るのではなかった」と非常に後悔して、心を平静にするように努めてようやく病気を回復したのですが、それ以来、そのフィールド夫人は腹を立てることが恐ろしくてとても腹を立てられなくなったそうです。この本は知人に貸してありますが取り寄せておいてまたお見せしましょう。

谷口——宇宙に「治す念波」が充ちている——これは事実です。神の大きな生かす力がこの「治す念波」です。誰でも、自分のうちに、この「治す念波」をもつていて、この自分の内に宿る「治す念波」は、宇宙に満ちている。「治す念波」と結びついていのです。心を素直に開いて「宇宙に満ちる治す念波」を受けると、自分のうちに宿っている「治す念波」が清まって生気を得て、本当に治す力を発揮するようになります。われわれ個人の内にも宿っている「治す念波」は、それはちょうど室の中にある空気のようなものです。室の中にある空気も外の空気とある程度までつながっていて、われわれを生かす力がある。そして、われわれの吐き出す炭酸ガスなどの毒ガスが穢けがされると生かす力が少なくなるから、また戸障子を解放して大気を部屋の中へ導き入れねばならぬ。それと同じように、われわれの内に宿っている「治す力」も、ある程度まで「宇宙の治す力」とつながっていてわれわれを生かす力があり、われわれを治す

力があるのですが、心が素直に平和に伸び伸びしないで人を怨んだり憎んだり恐れたりしていると、ちょうどわれわれが室内に炭酸ガスを吐き出すように心の中に毒ガスができて「治す力」「生かす力」が濁ってくる。そのため、健康な者も病気になったり、病気のもののは回復力が鈍ったりするのです。部屋の中に炭酸ガスが籠もったらわれわれは戸障子を開いて大気に解放するでしょう。それと同じようにわれわれはわれわれの心のうちにいろいろの不純な念がたまって自分のうちに宿っている「治す力」が鈍ってきた時には、大生命に向かつて心を開く。河合さんの著述にある、ミセス・フィールドもこれをやったのでしよう。淘宮とうきやうじゆう術では「大空に懺悔ざんげする」というそうですね。要するに心の戸障子を解放して大生命の海原から生きる力を汲むのです。この方法が「生長の家」の神しん想そう観かんです。

谷口——自分のうちに神秘的な生命力が宿っている、それは認める。それならば他の内ひとにも神秘的な生命力が宿っている、それをも認めなければならなくなるでしょう。その自分のうちに生きている生命力と、他人のうちに生きている生命力とが、一つの源のいっそう大きな生命力から来ているということは、われわれの内に生きていく力が、誰も彼も同じ相似の働きをしているのでも知ることができるでしょう。誰でも胃袋があり、腸があり、心臓があり、肺臓がある。その細部の構造設計までも似ている。別にある人が発明した「人体」という機械を、他の

人が真似をしてこしらえたわけではないのに、その細部の構造設計までが一貫した一つの同じ原理ででき上がっていることを思えば、われわれ各個人に宿る生命力は、各個人の肉体から出る個々別々の力ではなく、全体の生物を一貫して生かしている、共通的大生命力というようなものを認めずにはいられないでしょう。この共通的大生命力——これを称してわれわれは本源の神と呼ぶので、われわれにはこの本源の神の生命力が宿っていて、いろいろ生きた活きをしたり、物を考えたりしている。その「生きていく自分」というものはこの「本源の神」が宿って「自分」となっているのですから、「自分は神だ」ということになるのです。この「自分は神だ」という真理がわかり、そしていっそう大きな生命に結ばれているということがわかると、われわれはわれわれ自身の内うちに宿っている大きな生命力に信頼することができ、安心がそこから湧いて来、大きな自己癒能ゆのうもそこから湧いて来るのです。

谷口——死ぬのが恐ろしいのは、この肉体を人間だと思っているからでしょう。あなたは死ぬのが恐ろしいといわれませんが、人間は決して死なない、生き通しのものですよ。これが解れば人間は死ぬことが恐ろしくなくなります。死なない者に「死」を恐れるはずがない。死なないから、死を恐れようがないのです。あなたはこの肉体が死んだのち、われわれの生命が「生き通しの生命の海」の中に没し込んで個性が無くなるように思っています。

われわれが「生き通しの生命の海」に没しているのは、今このままでも「生き通しの生命の海」に没しているのです。そしてその「生き通しの生命の海」から常に間断なく生命を供給されている——それだからわれわれは生きています。われわれは、肉体が減びても滅びなくとも、依然として「生き通しの生命の海」の中に生きています。肉体が生きていては、「生き通しの生命の海」の中に溶け込んでいないと思ったり、肉体が減んでから初めて「生き通しの生命」と一つになれると思うのはまちがいです。われわれは今も、これからも、永遠に「生き通しの生命」の中に生きてそれに繋がっているのです。それならば、この「肉体の死」ということはなんであるかといえますと、あなたは画家ですが、肉体というものは、われわれの「生命」という画家の描いた絵の一つです。肉体が死ぬということは、その絵の一つを終わるということであって、画家自身が死ぬことではないのです。われわれは一つの絵を書き終わったら、また他の画布に描くのです。肉体はわれわれが「現界」という画布に描いた絵です。われわれは「念」という手法で「現界」という画布に絵を描く。それがわれわれ自身の現実の肉体であり、現実の境遇であります。それが終わったらわれわれは画布を変えて「霊界」という画布と同じく「念」という手法で絵を描くのです。画布が異っているから絵の表現も異う。一方は現界という粗い画布に描くから「肉体」という粗っぽい絵ができる。一方は霊界という精練された画布に描くから「靈

体」という精緻な絵が描かれる。しかし要するに「体」というものはわれわれ自身ではなく、われわれの描いた絵であるから、いくら現界、幽界、霊界と画布を変えても、自分の「念」という手法が変わらない限りは、同じような出来栄の絵ができるのです。現界で病気であつて、死んだら肉体はないから病気はないと思つて自殺する人もありますが、肉体が死んだ後も靈魂は存続している。靈魂は死の刹那のショックで意識を失うが、霊界で意識を回復すると、なんでも周囲が見えるものだから「自分は生きています」と思う、そうしてその次には「自分は病気だった」と思う、すると「自分は病気だ」という念によつて、その靈魂体に病気をあらわす。先日もうそういう例がありました。ある霊媒に十七年前に亡くなつた人の靈魂があらわれて来ましたが、依然として十七年前の臨終の苦しみを継続して苦しんでいました。

山本（医博）——インド人にはいろいろ神通力を發揮する者があるようです。僕の知っている外人に千葉中学で英語教師をしていたロビンソンという英人がありましたが、この人は正直な男で決して嘘を告ぐような男ではない。長らくインドにいたのですが、インドの婆羅門の行者には、これから何年間「定」に入るといつて、静坐する。すると世話役が口になんの薬液か知らないけれども注いでくれる。本人は精神統一の極、もう脈搏も呼吸も触知しうる程度にはない。いわゆる仮死状態といふべきものですが、それを石棺に納めて何年何月何日

これを開くと書いて、何年か一定の時期が来るまで地下に埋めて置く。一定の日限にちげんが来るとその石棺を掘り出すのですが、その時はまるでお祭り騒ぎで多勢おおぜいの観衆が集まって来る。その混雑を警戒するために英国の官憲が出張して銃剣をつけて護衛する。だから英国人でインド人が一度「定」に入って再び甦るといふ事実を疑っているものは一人もない。石棺を掘り出して蓋を開くと、依然として棺の中のインド人は「定」に入った姿勢をして坐っている。それに世話役が口を聞かせてまたなんの薬か知らないが、口に含ませ、それからマッサージのよいうなことをすると、数年間呼吸をせずつに仮死状態に這入はいっていたそのインド人の肉体が柔かくなり、呼吸を吹き返して再び以前と同じ人間生活に帰って来るのです。これなどはおもしろい現象だと思えますね。

第三章 「みんな一体」の信仰を語る

五 祖靈祭祀そらいさいしの形式

谷口——生長の家の神さまを祈るのと、キリストを礼拝するのと心のうちに矛盾をお感じ になるのは、神に關する考え方に偏寄かたよりりがあるからです。個人の人間靈は別として、救いの神は一つだということが本当に自覚できていないからです。神はイスラエルだけの神ではない。日本だけの神でもない、キリストが出て来られない前にも人類は救われたのである。それまでは人間を救わずに放って置くような神ならば本当の神ではない。イエスのまだ生まれない以前や、イエスの名の及ばないどんな

偏鄙へんびな世界にさえも救いの手のとどいている神であつてこそ、本当の神である。あらゆる空間とあらゆる時間とを包容して救つて下さるものこそ本当の神である。神の方は一つであるけれども、地上の人間の方は、国々および時代によって習慣や風俗や思想にいろいろ変化がある。そのために、神はその各種各様な人間が救いを受け容れるために時代および国々によっていろいろちがう神となつてあらわれなければならぬのです。旧約時代の神とキリストの神とは、大いに変わっている。これは神が進化したためではなく、人間が進化したために神がそれに相応ふさわしい姿で顕あらわれられたのである。時代が変わつてきて今までの宗教では迷信臭くさくて入れぬという人のために同じ一つの神ではあるけれども顕現を異ことにしてお顕われになつたのが、「生長の家の神」であります。キリストの神と「生長の家の神」とが互いに相容れないようにお考えになるのは、キリストの神を全包容的な神とお考えにならないで、他の神と対立的に存在するような小さな神だとお考えになつて傾きがあるからです。全包容的な神ならば、自己のうちにすべての神仏を包容して少しも矛盾を感じない神でなければならぬ。生長の家の神さまは、どの神を拜んではならぬとは仰せられない。どの神も同体であるから、どの神を通して拜んでもよいと仰せられています。排他的な神は、本当の神ではなくて執着をもつた人靈の顕現であるか、そうでなければ本当の神をば信者が勝手に人間的に解釈して、人間同様排他的に伝えるのです。この点においてキリストの神の神

髓を伝えているのは「生長の家」です。この点において
仏教の本当の神髓を伝えているのは、「生長の家」です。
一切包容のすべての宗教の神髓をつたえるために神界に
顕われられた一個の天使が——言いかえると一つの救い
の靈波が——生長の家大神であるとすると、キリストの
聖名と一緒に生長の家大神の聖名を称えても一向矛盾を
感じないのは当然ではありませんか。

生命の實相 谷口雅春 日本教分社